THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA

なごやちくさ WEEKLY

名古屋千種ロータリークラブ
承　認　1982年　8月24日
例会日　火曜日　12：30
例会場　愛知厚生年金会館
事務局　〒464 千種区池下一丁目4番18号
井上ビル4F　D号
Tel 763－5110
会　長　加藤大豊

見つけよう　奉仕の新生面
Discover a New World of Service

No. 35

1984～85年度 RI 会長 カルロス・カンセコ

第129回例会　昭和60年3月12日 (火) 曇

◇ “我等の生業”

◇出席報告

会　員　53(55)名　　出席　40名
出席率　75.47％
前　回　3月5日　(修正出席率)　98.11％

make up
橋本君(3/6名北)，堀江君(3/6名北)，河合君(3/6名北)，木全君(3/7西)，小林君(3/8北)，黒野君(3/6名北)，新美君(3/6名北)，斉藤君(3/8北)，菅原君(3/4東)，杉山君(3/6名北)，寺沢君(3/4空港)

◇ビジター紹介　6名

◇お誕生日祝福

斉藤夫人 (3/14)，安藤夫人 (3/16)

◇ニコボックス

青山君（本日早退致しますのと15日のゴルフ同好会欠席を兼ねて），菅原君（(財)日本水連60周年記念に際し，功労賞を頂きました），武内君（本日のゲストスピーカーに加藤清之先生をお迎えしました），太田君（3/16で満30年（真珠婚式）を向えることが出来ました。本当にありがとうございます。結婚記念祝），久保田君（バッチ付け忘れました），竹内君（日韓親善に一寸行ってきました），新美君，堀場君（本日早退させて頂きます），斉藤君（夫人誕生日祝），安藤君（夫人誕生日祝）河合君(結婚記念祝)，永井君（結婚記念祝）

◇谷口幹事報告

1　事務員の宮野さんが，今月より正社員として採用される事になりましたのでご報告申し上げます。

◇菅原海外姉妹提携クラブ委員長報告

1月末の理事会で人選されました9名の委員により，3月1日第1回委員会を行いました。只今，海外姉妹提携に関する資料を作成しておりますので，今後とも，皆様の御協力をお願い致します。

◇和田親睦委員長報告

3月19日の例会を変更し，3月21日(木)に星ケ丘ボウルにて，例会及び家族懇親会をP.M。17:30より開催致しますので，出席ご予定の方はおまちがいのないようにお願い致します。

◇林写真同好会幹事報告

本日，例会終了後，琴の間にて第1回写真同好会打ち合わせ会を行いますので，同好会員の方はお集り下さい。

◇加藤大豊会長挨拶

ロス五輪で右足を痛めながらも金メダルを勝ち取った柔道の山下泰裕選手は，なかなか陽気な青年です。世界の強豪を相手に，現在198連勝中という途轍もない記録を持ち，つい先日も，政府から国民栄誉賞が贈られました。その山下選手が金メダルを胸に故郷の熊本に帰った時，小学校の級友達が，彼に一枚の賞状を贈りました。それには「ヤッちゃんは類い希れな体格と激しい性格で，我々同級生に多大な被害を与えましたが，今回のオリンピックは，それを補って余り有るものであります。」とあったそうです。
超肥満児の暴れん坊が，エネルギー発散のために柔道を始め，ついに世界の最高峰に上ったのです。しかも4年前の絶好調時に起きたモスクワ五輪ボイコットという大きな壁を乗り越えてのことだけに立派です。彼は，いつも勝ちたいというプレッシャーを持って試合に臨みました。特にロス五輪の場合，日本国民の期待と選手団のキャプテンとしての役割，日本柔道を守るといった様な諸々の事から来

るプレッシャーは，相当大きなものであったようです。日本でのアマチュアスポーツの評価が低いことを山下選手は嘆いています。
彼が1981年世界選手権で2階級制覇した時，フランスの新聞は世界のスポーツ10大ニュースの6番目に，この記事を載せていました。ところが日本のニュースにはこの記事は載らず，元巨人軍長島監督が何浪を宣言したとか，千代の富士が横綱になったとか，という事ばかりでした。世界の舞台で2階級に優勝することは大変な事です。しかし，それが日本のマスコミでは，アマチュアよりプロが優先してしまいます。昨年のロス五輪で日本勢が負けたのは，精神的に弱かったからだとよく言われますが，何故，日本の選手が精神的に弱く，外国の選手がそれに強いのかという背景については，あまり論じられません。外国選手が力以上のものを出せるには，それだけの理由があり，死に物狂いで限界を超えた力を出させる何かがあるのです。それは，回りの評価であったり，社会主義国や韓国などで見られる様な年金の問題です。山下選手に負けて銀メダルに終った。エジプトのラシュワン選手が国に帰った時，豪邸一軒をプレゼントされており，それだけ評価されるという事です。それがベストを尽くすのか，あるいは死力を尽くして戦うかの差になって表われてくるのです。物とかお金が日本の現状に合わなければ，やはり社会的評価が高くなるようにすべきです。もう少し勝てる背景にも目を向けてもらいたいものです。アマチュア選手は国から補助金を貰っていますが，それも外国の$\frac{1}{10}$程度です。そこには彼らの青春をかけた自己犠牲もあります。この辺の事情を理解して頂かなければ，アマチュアスポーツの発展は望めません。過去のオリンピック金メダルをとった人でも，現在恵まれた生活をしているとは限らず，日本では，金メダルをとっても生活できないのが現状です。

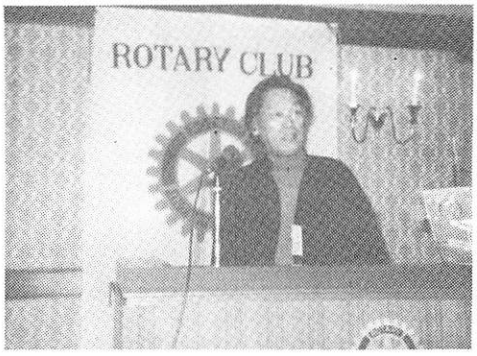
◇講演

“土こね40年”
――― 生きている焼物 ―――
陶芸家　加藤　清之氏　　（紹介　武内君）

すばらしいタイトルを中京テレビの方に付けて頂きました。テレビ番組のようなタイトルで，私の話がタイトル負けするのではないかと不安です。

私が何故土で作品を作るようになったのかについてお話し致します。

幼い頃の私は人見知りをする子で，幼稚園は嫌いでした。小学校に入学すると友達と遊べず，運動は嫌い，図画や工作が好きで，毎日画いたり作ったりして自分自身を取り戻し



ていました。自分の生家は，織別焼の上薬を掛けた屋根瓦を作っており，徳川美術館の屋根は，自分の家で焼いたものでした。

昭和19年，愛知県窯業学校に進学。土の感触は新鮮で面白く，熱中しましたが，当時，戦争が烈しく，学徒動員等で自分自身でなかった時代でした。終戦と共に，学校も瀬戸窯業学校と改称し，6年制になり，油絵を描いたり，石膏を造ったり，高校2年でヌードのモデルを描くこともありました。当時としては，進んだ考え方の先生のもとで学び，美術全集のゴヤの「裸のマヤ」を眺め，美しい物に憧れたこともありました。

その頃，近くに古瀬戸の窯があり，鎌倉・室町時代の古い焼物の断片を集め，描く事，造る事により感覚の世界に目覚めていきました。20代始めは絵描きになりたいと思っていましたが，後半になると油絵から土に移行し，土が自分の膚に合うように思われました。作品を造るには轆轤で直ぐに焼くのではなく，イメージに合う素材，自分に合った素材を選んで造り上げます。今まで絵を描くのに多彩な色を使ってきましたので，土では余り多くの色を使用する気持ちにはなれず，土の質を大切にし，限られた色を選ぶようになりました。又，土によって焼き方を選び，出来るだけ余分な物を除いた形にします。
40代になってから，自分の作品と同じ物は，古代から存在しないと言う，一つの小さな自負を持つようになりました。

土を扱いながら形を造り出すと，イメージや，行為が高まり，自分自身が透明になるような気がします。作品が出来上ってゆく過程は，ある女性を好きになり，いろんなプロセスを経，心を高めてゆく……。これに似ているように思います。作品が完成に近づいた時は，透明な気持で自分自身になりきっている時です。

私は焼き物を作る事により，自分を保ちます。そこには幼い時，夢中になって絵を描いた頃と同じ自分があるのかもしれません。このようにして出来上がった焼き物が生きている事は，得体の知れない怪しい物なのです。

（文責　寺澤）

◇次回例会（3月19日）
家族懇親会の為，3月21日㈭星ケ丘ボウルにてP.M.17:30より